

ユース(高校生)世代における 制式艇種の統一に向けて

子どもたちにリスクを取らせるな

まず私たちが共有すべき価値観は「ユース世代にリスクを取らせてはいけない」という命題です。自ら生計を立て、自らの判断で物事を選択することのできる社会人であれば、どんな艇種に乗り、どんなイベントを目標に据えて活動することも自由であり、そこで得られる恩恵(栄誉や歓び)と同時に派生するリスクも負うべき立場にあります。

しかし、親がかりでセーリング競技に取り組んでいるユース世代は、自らが活動する場を自ら選ぶことはできません。彼らは、大人がつくった枠組みのなかで、全力を尽くすことしかできないのです。

もちろん、どのような枠組みであったとしても、青春時代の情熱や努力が全くの無駄になることはありません



が、私たち大人世代は(親も含め)、彼らの将来にできるだけ多くの果実をもたらすような「枠組み」を用意してやる義務があります。

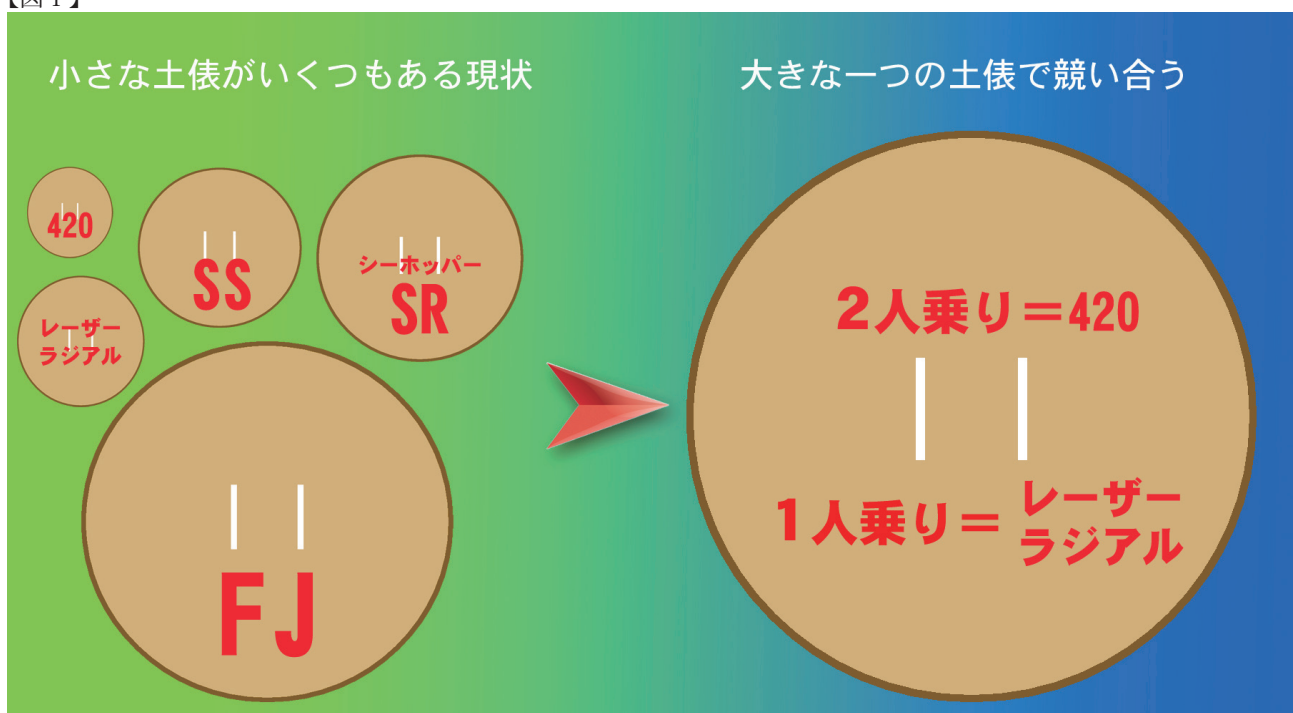
ひとつの大きな土俵で競い合う

その大前提となる理念は、同世代のアスリートたちと競い合う土俵をできるだけ大きくして、多くのライバルたちと切磋琢磨できるものにすることです。現在、国内のユース世代のセーリング競技はイベントによって異なる艇種が採用されているため、小さい土俵が複数存在している状況です。

これは、バレーボールに例えるなら、同じ高校生が6人制や9人制、果てはビーチバレーなどに分かれて活動している状況といえます。ユース世代では国内最大の競技人口(男女併せて)を誇るバレーボールですら、ユース世代の種目は6人制ひとつに統一されています。ましてや競技人口の極少ないセーリング競技において、現状のように活動種目が複数に分かれていては、コンペティティブで質の高いイベントを実現することは困難です。

私たちが取り組むべきは、ユース世代のセーラーたちが競い合う土俵を一つに統一し、その土俵に集うアスリートの総数をできるだけ増やすことにあると考えます。このことが、質の高いヨットレースを実現し、そこで真剣に取り組む若いセーラーたちの将来に多くの果実をもたらすものであると信じます。

【図1】



制式艇の多様化がもたらすコスト増

国内のユース世代が目標にする大会は高校総体（インターハイ）と国体です。この2つのイベントが採用する制式艇は高校総体＝FJ級、国体＝SS級＋シーホッパー級SRの3クラスとなっています。

さらに、現段階では全てのユース世代が目標にしているわけではありませんが、ユース世代の国際大会であるISAFユース世界選手権では、主に420級男女、レーザーラジアル級男女、29er級（オープン）、マルチハル（オープン）とボードクラスのRS-X級男女が採用されています。国内の現状に当てはめた場合、420級とレーザーラジアル級がFJ級とSR級を補完し合うような形になります。

以上のような状況をまとめたのが下の図2です。現在、国内のユース世代のセーラーが高いレベルで競技に取り組もうとすると、実に5つのクラスを用意しなければなりません。個人で全てのクラスを揃えることが困難であることはもちろん、高校のヨット部や県連、またジュニアヨットクラブのような団体であっても、これらのクラス全てを用意し、レース艇として不足ない程度に買い換えていくというコストは、そう簡単に負担できるものではありません。事実、少年種目にSS級が採用された秋田国体（2008年）から、少年の2人乗り種目の参加県が目に見えて減り始めています。

イベントによって制式艇が異なるという状況は、日本のユース世代の底辺を明らかに狭めているという現状認識を、我々はきちんと共有する必要があります。

制式艇を選ぶ基準とは

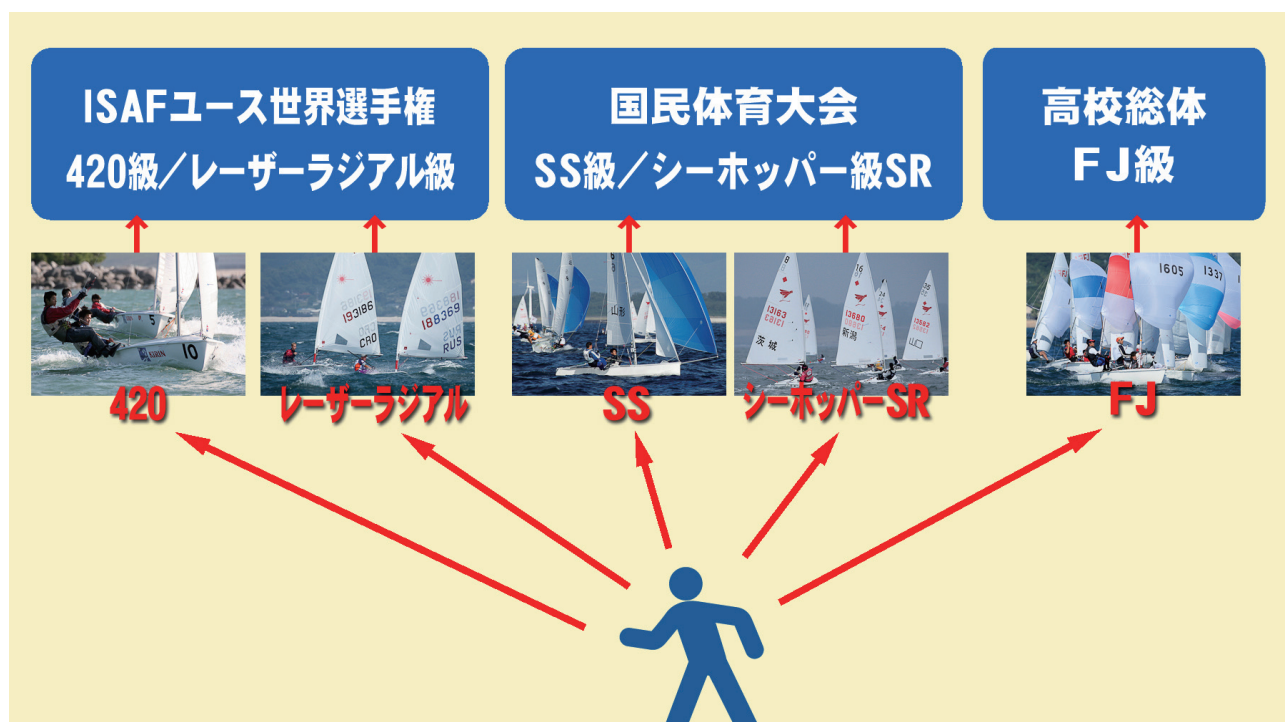
では、ユース世代の制式艇を白紙の状態から選び直すとは仮定して、それは、いったいどのような基準で選ばれるべきでしょうか。大きな土俵をつくるという理念から出発するのであれば、できるだけ多くの参加が見込める艇種を選ばなければなりません。

日本各地に散らばる高校ヨット部やジュニアクラブは、それぞれ異なる背景の下で活動しています。地理的条件はもちろん、レスキュー態勢、選手や指導者のレベルもまちまちです。そんな様々なクラブが全て参加できる枠組みをつくるためには、最低限の安全性が担保できる艇種であることが第一条件となります。

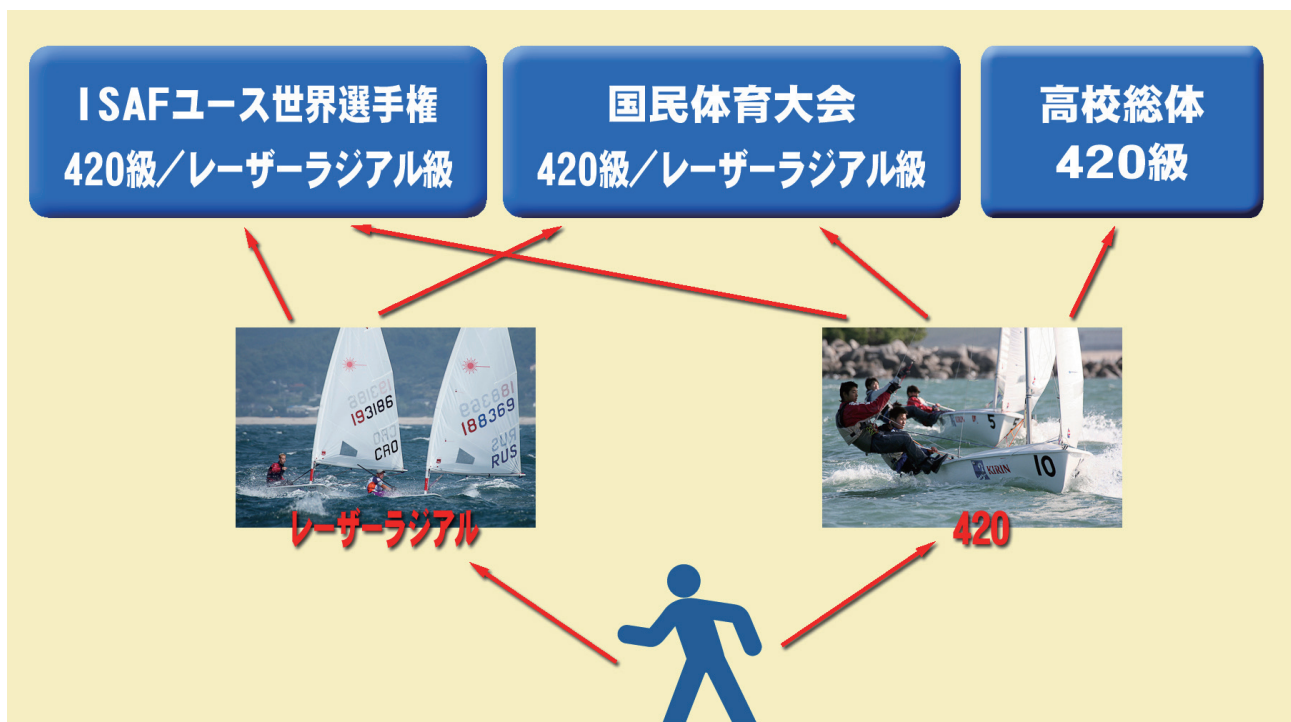
早い段階からハイパフォーマンスディンギーのような高度な技術を要する艇種で練習すべきだという考え方もありますが、練習環境が貧弱なクラブでは安全性が担保できず、満足に練習できないという状況が生まれることは容易に想像できます。ちょっと風速が上がっただけで海上練習を中止しなければならないようでは、せっかくのハイパフォーマンスディンギーも宝の持ち腐れとなってしまいます。

ちょっとぐらい風が強くても毎日海に出て練習することができ、セーリングのベーシックな技術を醸成することができる艇種こそが、ユース世代の制式艇種として最も適したものであると考えます。それは、低いレベルのクラブに合わせるということではなく、あくまでもベーシックな艇種であるということです。

【図2】



【図3】



420 級とレーザーラジアル級

最低限の安全性が担保されていて、ベーシックなセーリングの技術が身につくという条件なら、現時点で国内で最も普及している FJ 級に統一するという選択肢が考えられます。しかし、国際レガッタを視野に入れた場合、ユース世代を対象にした主要国際レースでほとんど採用されることのない FJ 級という選択は、日本のユース世代のセーラーが世界に出て行く道筋を狭めてしまうことになります。ユース世代の制式艇種を選ぶ2つめの基準は、主要な国際レースで採用されている艇種であるということです。

ユース世代を対象にしたレガッタで、最も多くの参加国を集め、高いステイタスを持っているのが、毎年7月に行われている ISAF ユース世界選手権です。このレガッタは、ISAF がその年の制式艇種を選ぶことになっていますが、多くの場合、2人乗り種目として 420 級、1人乗り種目としてレーザーラジアル級が選ばれてきました。

この2クラスは普及している国数も多く、クラス協会の活動も盛んで、クラス協会が主催する国際レガッタの数も多く、若いセーラーが世界を舞台に武者修行する舞台が整っています。

以上のような状況を踏まえた結果、ワールドスタンダードに合わせ、2人乗り種目を 420 級に、1人乗り種目をレーザーラジアル級にという組み合わせが、現時点で最適な選択だと考えます。そうすれば、上の図3のように 420 級とレーザーラジアル級の2艇種を用意するだけで、国内外の主要レガッタの大半に出場する機会を与えることができます。

ワールドスタンダードが変更されたら

420 級とレーザーラジアル級がワールドスタンダードとなっている背景にあるのは、これらのクラスがベーシックなセーリング技術を習得するのに適していて、セーリング先進国から後進国まで幅広く取り組むことができる普遍的な艇種であるという認識です。

しかし、ここで一つのリスクの存在に言及しておく必要があります。制式艇選出の一つの基準としたワールドスタンダードが変更されるというリスクです。最も権威のある ISAF ユース世界選手権の制式艇に 420 級やレーザーラジアル級が採用されなくなったとしたら、私たちは再び制式艇を選出し直すか、さもなくばドメスティックな領域に閉じ込められることになってしまいます。

オリンピック艇種の選出で迷走を続けている ISAF の現状を見る限り、そうしたリスクが必ずしも低いものとは言えませんが、420 級やレーザーラジアル級の普及具合を考えれば、仮に ISAF ユース世界選手権で採用されなくなったとしても、クラス協会などが中心となってユースを対象にした国際レガッタは行われていくと予想されます。

ワールドスタンダードに合わせるということは重要なポイントではありますが、そればかりに振り回されてしまつては、国内のセーリング環境はいつまでたっても成熟しません。制式艇種については腰を据えて取り組むしかありません。世界に対してはアジアの大国である日本も 420 級とレーザーラジアル級を採用したという事実をもって、現在のワールドスタンダードをより強固なものにしていくという揺るぎない姿勢で臨むべきでしょう。